人未之知也歟、

〔物類稱呼四器用〕發燭つけぎゆわうぎ　東國にて、つけぎといふ、關西にて、ゆわうと云、越後にて、つけだけと云、土佐にて、つけぎと云、又つけだきと云、

今按に、關西にてゆわうといふは、ゆわうぎの下略成べし、又外より重の物にもあれ、何にもあれ贈り來る器の內へ、うつりに紙或はつけ木を入て返す事有、硫黃又いわう共いひ侍れば、祝ふといえる心にて、つけぎを入る事ならん、又東國にて、うつりといへる物を、土佐の國などにては、其器に入て返す物の名をば、とめといふ、又越後にてつけ竹といふは、むかし竹を薄くへぎて、今のつけぎの如く用ひたるとぞ、土佐のつけだき、つけだけ成べし、

〔嬉遊笑覽十下火燭〕發燭、職人盡に硫黃箒賣あり、燭奴（ツケギ）とはいきとを賣ものなり、古へはいわうとのみいへりと見ゆ、これは木も竹もあるべし、宗因が俳諧に、たばこのむかと火打つけ竹さびしさは同じ借屋のとなりどの、と云句あり、寛文六年の作なり、その頃は竹を用ひしかば、これをつけ竹といへり、

〔たはれ草〕いつの時にかありけん、材木のつひえをいとひ、のりものゝ櫃ほそまりしとき、むかしはさゝら竹に、硫黃をつけ、これをつけたけといひしに、今の世ひの木を用ふるいかゞなりと、こざかしき人のいへるにより、さらばとて、つけ竹にあらたまりけれど、ほどなくやみてけり、小事にこゝろをもちふるもをかし、またはなしのみきゝて、いまだこゝろみざる事を、みだりにいひもちふるもうらめし、

〔雍州府志六土產〕硫黃　凡檜木長五寸許、割之爲小片、塗硫黃少許於其端末、點火於其末、著薪柴、是謂硫黃木、稻荷社前幷伏見墨染人家所造爲宜、則中華所謂引光奴也、上賀茂神惡硫黃、故以燧石鑽火點之藁、